2020 年６月 11 日

報道関係者各位

筑波大学
University of Tsukuba

国立大学法人　筑波大学

食物の誤嚥による窒息死は１月１日に最も多い

～11 年間の全国での死因統計を解析～

研究成果のポイント

1. 2006～2016 年の人口動態調査死亡票のデータを 2 次的に活用し、「気道閉塞を生じた食物の誤嚥」による死亡（以下、食物の誤嚥による窒息死）の特徴を解析しました。
2. 食物の誤嚥による窒息死は 1 月 1 日に最も多く、場所としては家が、年齢としては 75 歳以上に多いことが示されました。
3. 食物の誤嚥による窒息死を減らすためには、高齢者に対し、特に新年に注意を喚起することが望まれます。

筑波大学医学医療系ヘルスサービスリサーチ分野/ヘルスサービス開発研究センターの田宮菜奈子教授、岩上将夫助教、谷口雄大・同大学院博士課程1年らの研究グループは、我が国の死因統計である人口動態調査死亡票のデータを、厚生労働省の許可を得て２次的に活用し、国際疾病分類第10版(ICD-10)における「気道閉塞を生じた食物の誤嚥(W79)」による死亡（以下、食物の誤嚥による窒息死）の特徴を解析しました。

2006～2016年の全国での食物の誤嚥による窒息死５万2366例を解析した結果、73%は75歳以上の後期高齢者でした。暦日の中では1月1日(平均71例)に最多であり、次いで1月2日(同55例)、1月3日(同45例)に多く、研究期間中の1日平均発生数（同13例）を大きく上回ることを示しました。また、発生場所としては家が57%で最多であり、次いで18%が居住施設で発生したことを明らかにしました。

今後、食物の誤嚥による窒息死を減らすためには、高齢者に対し、特に新年に注意を喚起することが望まれます。

※本研究の成果は、2020年6月13日付「Journal of Epidemiology」でオンライン先行公開される予定です。

※本研究は、厚生労働科学研究費補助金（長寿科学政策研究事業）（H30-長寿-一般-007）の助成を受けて実施されました。

研究の背景

加齢とともに人間の嚥下機能は低下し、食物の誤嚥による窒息も起こりやすくなります。急速に高齢化が進む中、食物の誤嚥による窒息の増加が懸念されます。本研究では、日本全国における食物の誤嚥による窒息死の実態を、経時的変化、地域差を含めて明らかにしました。

研究内容と成果

本研究チームは、わが国における死因統計である人口動態調査[注1)]死亡票のデータ(2006~2016 年分)を2次的に活用し、研究を行いました。国際疾病分類第 10 版(ICD-10)[注2)]に従い「気道閉塞を生じた食物の誤嚥(W79)」による死亡(以下、食物の誤嚥による窒息死)とされた5万 2366 人を解析対象としました。

解析では、食物の誤嚥による窒息死について、性別、年齢、発生場所、死亡年月日を分析しました。また標準化死亡比[注3)]を用いて都道府県ごとの人口の年齢構成の違いを調整し、食物の誤嚥による窒息死の発生割合を都道府県間で比較しました。

解析対象5万 2366 人(年齢の中央値:82 歳、男性割合:53%)のうち、57%(29,777/52,366)が家で、18%(9,488/52,366)は居住施設(老人ホーム等)で発生していました。発生場所に占める居住施設の割合は年齢とともに上昇し、65~74 歳では 8.4%(1,183/14,148)、75~84 歳では 16%(2,595/16,513)、85 歳以上では 26%(5,710/21,705)でした。

食物の誤嚥による窒息死数は毎年概ね 4000 人台で推移していました(図 1)。しかし、発生割合は 75~84 歳では 10 万人当たり 16.2 人(2006 年)から 12.1 人(2016 年)へと、85 歳以上では 10 万人当たり 53.5 人(2008 年)から 43.6 人(2016 年)へ減少していました(図 2)。2006~2016 年の合計で、暦日の中で最も死亡数が多かったのは 1 月 1 日、次いで 1 月 2 日、1 月 3 日でした(図 3)。標準化死亡比は新潟県で最大(1.38)、京都府で最小(0.60)でした。

以上の結果より、食物の誤嚥による窒息死が 75 歳以上の後期高齢者に多く、発生場所としては家、発生時期としては 1 月 1 日~3 日に特に多いことが明らかになりました。原因食物の種類は今回用いたデータに含まれていませんでしたが、わが国では正月に餅を食する習慣があり、餅が原因となっている可能性が高いと考えられます。

今後の展開

本研究は、個々の誤嚥を引き起こした原因の食物を明らかにできていないなど、研究上の限界があります。しかし、食物の誤嚥による窒息死が 75 歳以上の後期高齢者に多く、また場所としては家、時期としては 1 月 1 日~3 日に多い実態を全国規模で明らかにしたことは意義深いと考えます。また、死亡数が毎年概ね 4,000 人台で推移してきた一方、75 歳以上の人口あたりの発生割合が近年減少傾向であることも注目に値します。因果関係の検討は今後必要ですが、近年、行政やマスメディアが食物の誤嚥による窒息の危険について広報しており、市民の啓発が徐々に進んでいるのかもしれません。今後、高齢化の進行とともに食物の誤嚥による窒息は増加することが懸念されますので、高齢者に対し、特に新年に注意を喚起していくことが望まれます。

参考図

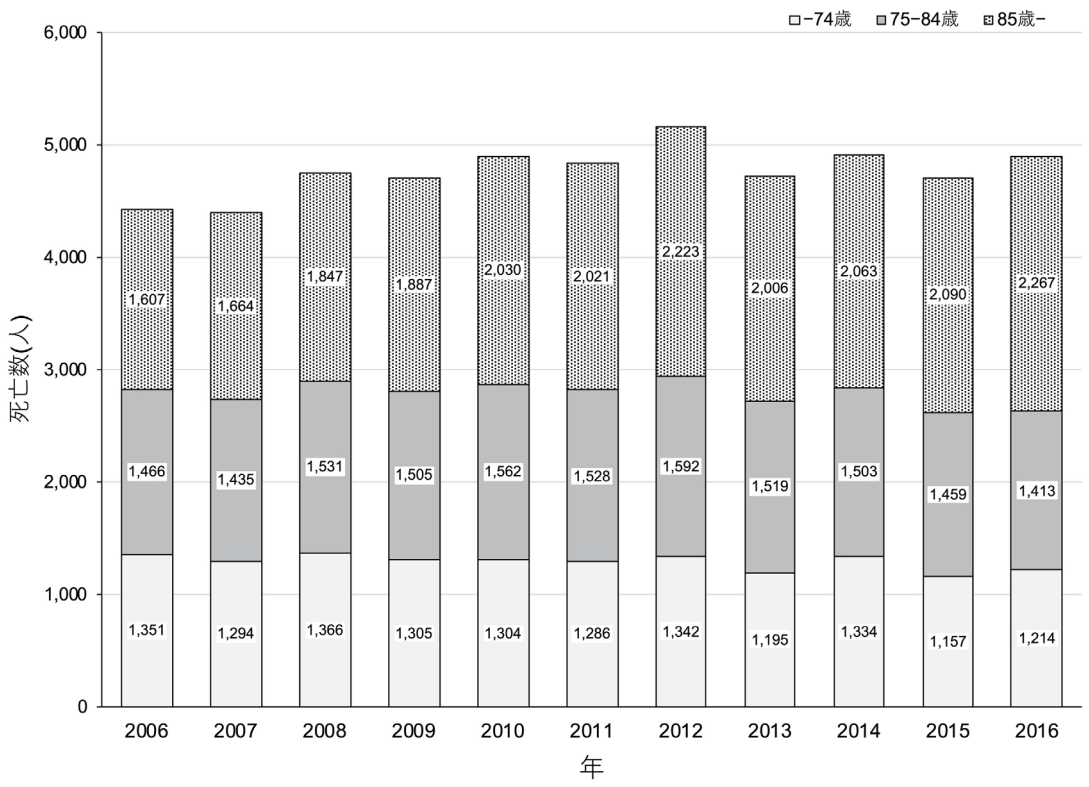

図 1：年齢別にみた、食物の誤嚥による窒息死数の推移

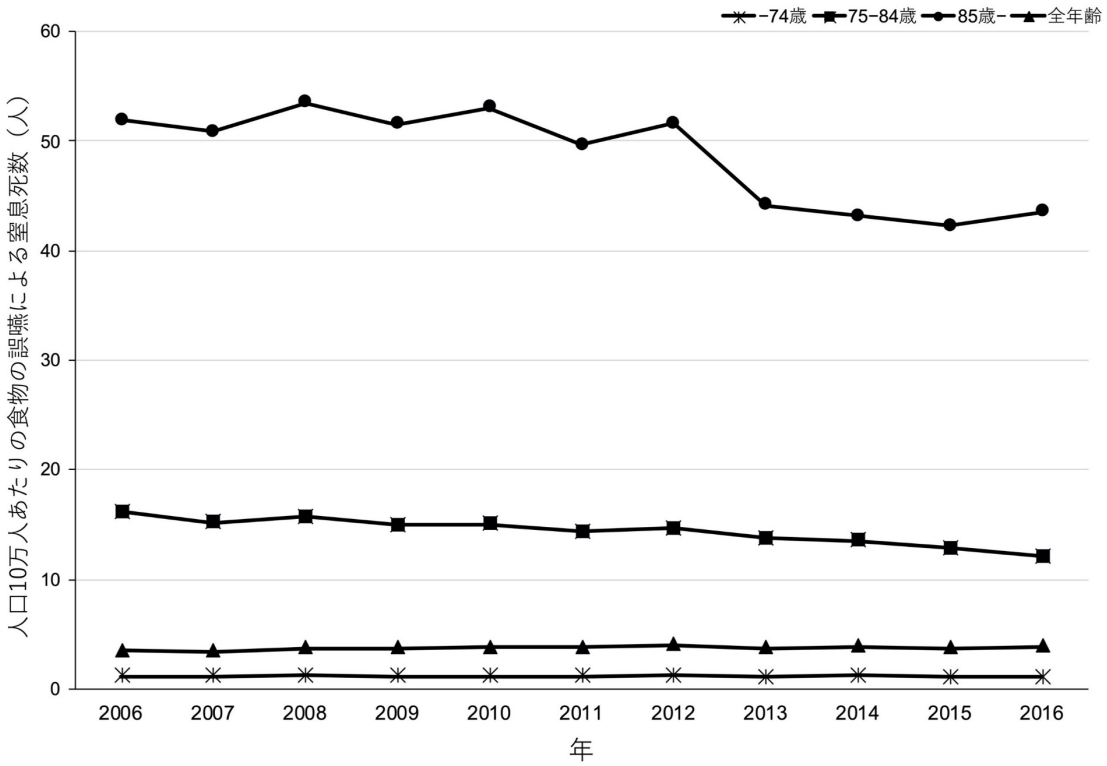

図 2：年齢別にみた、食物の誤嚥による窒息死の発生割合の推移

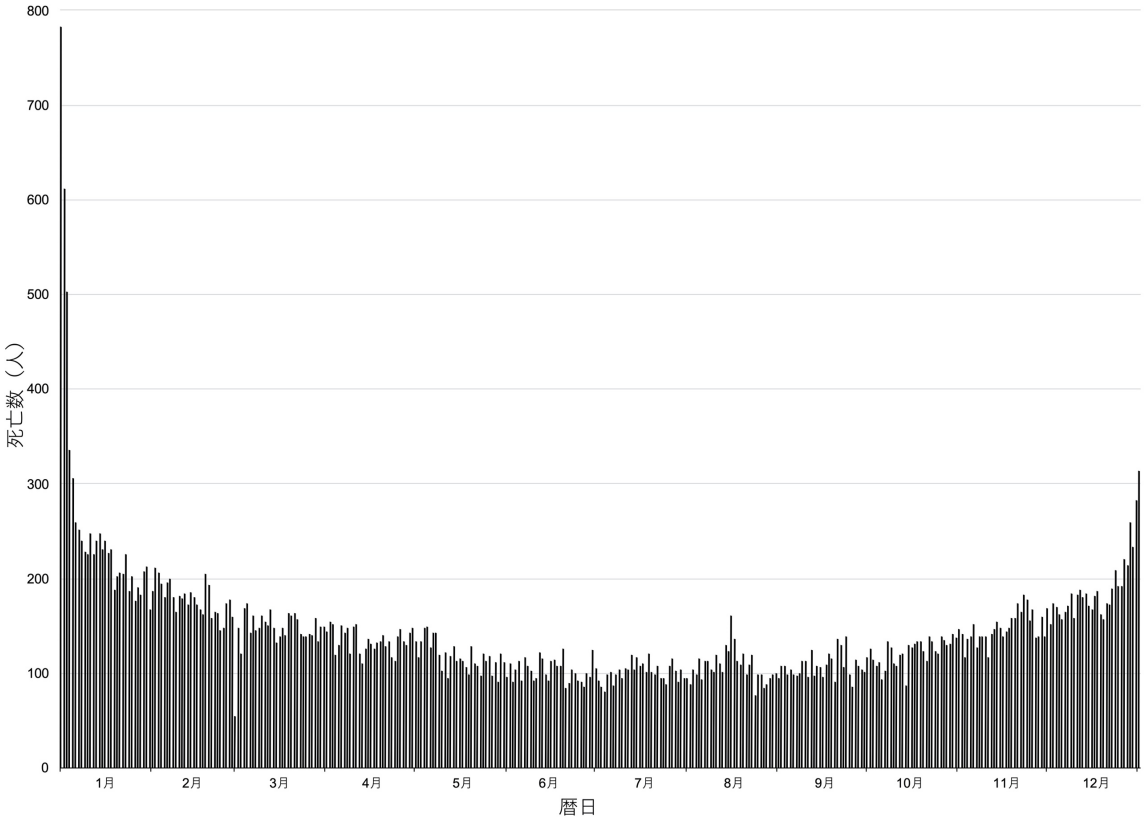

図 3：暦日ごとにみた食物の誤嚥による窒息死数（2006-2016 年の合計）

用語解説

注1）人口動態調査　わが国の人口動態事象を把握し、人口及び厚生労働行政施策の基礎資料を得ることを目的に厚生労働省が行う調査で、わが国における出生、死亡、婚姻、離婚及び死産の全数を対象に集計している。このうち死亡票では、死亡年月日、死因等を集計している。

注2）国際疾病分類第 10 版(ICD-10)　正式名称は「疾病及び関連保健問題の国際統計分類（International Statistical Classification of Diseases and Related Health Problems）」で、疾病、傷害及び死因の統計を国際比較するために世界保健機関から勧告された統計分類である。

注3）　標準化死亡比　ここでは、観察集団（本研究では各都道府県）における食物の誤嚥による窒息死の発生割合が、基準集団（本研究では全国）と比べてどの程度高いかを示す比である。

掲載論文

【題　名】Epidemiology of food choking deaths in Japan: Time trends and regional variations
（食物の誤嚥による窒息死の疫学：経時的変化と地域差に関する研究）
doi:10.2188/jea.JE20200057

【著者名】　Yuta Taniguchi (First author), Masao Iwagami (Corresponding author), Nobuo Sakata, Taeko Watanabe, Kazuhiro Abe, Nanako Tamiya

【掲載誌】　Journal of Epidemiology

問合わせ先
岩上　将夫(いわがみ　まさお)
筑波大学 医学医療系 ヘルスサービスリサーチ分野 / ヘルスサービス開発研究センター 助教

田宮　菜奈子(たみや　ななこ)
筑波大学 医学医療系 ヘルスサービスリサーチ分野 / ヘルスサービス開発研究センター 教授